

「恩納村歴史・風景散策路」での多言語歩行者系標識による有効性検証実験

道路建設課 課 長 ◎照屋正史
課長補佐 末光勇次
道路整備係長 仲村正成
計画係員 ○相川浩二

1. 目 的

恩納村は、県内でもリゾート施設が多く立地しており、当該地を訪れる観光客は国内外を問わず多く、県内有数の観光拠点である。特に同村は近く大学院大学の開校も迫っており、外国人来訪者が多く訪れることが予想される。一方、同村内の観光拠点案内(特に案内看板・標識)は、日本語表記が主流で外国人にとっては不便なものとなっているのが現状である。そのため、多言語による分かりやすい案内・誘導を行う仕組みづくりを検討し、全国レベルで統一を図る際の基礎データとして調査検討を行うことを目的とする。

併せて、国として地域支援が模索される中、具体的なメニューの検討も目的としている。

2. 内 容

多言語表記による歩行者系案内標識の検討

日本語・英語・中国語(簡体／繁体)・韓国語の5カ国語表示とし、標識板の大きさ、設置場所等について、観光客等(在日外国人含む)へアンケートを実施し、利便性・満足度について検証を実施。

(具体的な調査項目)

- 文字サイズ
- 表示内容
- 標識デザインの検討(支柱、標示板・文字の色、ピクトグラムと素地の背景の色)
- 多言語表示の検討(地図案内標識、誘導標識)
- 設置場所の検討
- 設置手法の検討

3. 結 論

スペースの限られた歩行者系標識の中で、多言語表記による案内手法について文字サイズ、表示内容及び利用者の認識性の観点からも標識・支柱デザイン、文字色などについても外国人モニター等のアンケートの結果から一定の結果が得られた。特に歩行者系標識については現行の標識令の中で明確な仕様がなかったことから全国的にも有効な実験であったことといえる。

また、今回は恩納村主体の取り組みについて国として技術的支援、広報等バックアップを行った。このことは国の地域支援施策の具体的な施策として有意義なものであった。

4. 今後の問題点

- ・今回対象とした言語以外でもポルトガル語、スペイン語等の希望があり、今後新たな言語を対象とした案の検討。
- ・他の拠点案内における運用の可能性検討